
かごの中でガール

上田不伝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かこの中でガール

【Nコード】

N0368R

【作者名】

上田不伝

【あらすじ】

比較的高い建築物にはだいたい備わってる昇降するアレの中で暮らす少女と？ばく？のお話。

プロローグ

「へえ。それじゃわたしのニコ下だ」

「そうなんですか？ でもあんまり十七、八には見えませんよね」
「うん。よく言われるよ」

たまにだけど——と佐奈華さんは続けて、湯呑みに口をつけた。
ズブーと露骨なほどに音を立てて緑茶を咀嚼する。縁無し眼鏡のレンズがじわじわ曇っていくのが見えた。

ぼくの前には紙コップがあって、中には佐奈華さんが飲んでいるのと同じお茶がいっぱいに湛えられている。尋常じゃないくらいの味が濃さが一口頂いただけで分かった。

ぼくは冷えた手を炬燵に入れる。小さな炬燵は二人いるくらいで丁度いい。

「あれだろ？ タノ目学園」

佐奈華さんは湯呑みを置いて言った。

「そうです。佐奈華さんもそこ通ってたんですか？」

「んーん」

そこで佐奈華さんはテーブルに置いてある棒を拾った。学校の先生なんか黒板を差すのに使う長い差し棒で、先っぽが指差す人の掌を模した形になっている。佐奈華さんはそれで漸くボタンを押してくれた。

「学校さ。楽しい？」

「この4月から高校生なんで、高校のことはわかりませんよ。あと佐奈華さん、ボタン間違えてます」

「ん。ああすまん。こっちだったか」

「はい」

正しいボタンが押されたのを見届けてから、ぼくはお茶を一気に飲み下した。濃い上にひどく熱かった。

佐奈華さんはやおら立ち上がったかと思うと、箆笥から毛布を取り出した。ぼくが出てったら寝るつもりらしい。

よく考えたらもう0時前だ。こんな時間にお邪魔したぼくも悪い。佐奈華さんが眼鏡を外し、ひとつ大きなあくびをしたところでチーンと音が鳴った。

「それじゃ、おやすみなさい」

「おう」

自動で開いた扉から外廊下へ出て、自動で閉まる扉の向こうへ手を振る。

生活観溢れるそのかごは鉄扉によって完全に閉ざされた。

エレベーター住人・幽谷佐奈華さんは今日、ぼくの住む4階で寝ることになるのだろう。

ごみ捨て

佐奈華さんの朝は早い。

起床時刻はだいたい6時前後で、それは502号に住む志田さんが上下ピチピチのランニングウェアを老躯にまとって外出する時刻と重なる。つまり彼が鳴らす？上へ参ります？ないしは？ドアが開きます？が佐奈華さんにとってのモーニングコールとなるのが常であるらしいのだ。？下へ参ります？で起こされることがないのは、最上階である6階に同居者がいないからだ。

「どうせこれからジョギングに出掛けるのだから、階段を使えばいいのにな」

佐奈華さんは湯呑みを片手に愚痴った。

「そういえば昔、わたしのお婆ちゃんも早朝にジョギングしていたんだよ。たった五日でやめてしまったけれどね。なぜだと思う？」

「……」

「風邪をひいたからなんだ。健康のことを考えて始めたジョギングなのに、ジョギングのせいで健康を損なったんだ。別に風邪自体は大したことなくてすぐに治ったんだけど、そのことが馬鹿らしくなってやめちゃったんだよ。走らない方が健康じゃないかってね」

「……あの。佐奈華さん」

「ん？ どうした。ところでなんでそんな汚い袋を提げてるんだ？」

「ごみを捨てにきたからです。ボタン押してもらえますか？」

「ぼくは右手に持ったごみ袋を佐奈華さんの前で揺らした。スプレ缶や乾電池などががちゃがちゃ音を立てる。」

「おう。そうかそうか。今日は不燃ごみの日か」

差し棒を取って、佐奈華さんは1のボタンを押した。

かご内では昇降はすべて彼女にかかっている。入って左側の袖壁に取り付けられた操作盤は年季の入った和筆笥で塞がれているし、

右手の側面壁に据えられた操作盤は少し奥まったところにあつて、炬燵に片手をついて身を乗り出さないと届かない。そしてそんな行為をしようものなら佐奈華さんは行儀が悪いと言って柳眉を逆立てるのだ。

「これ、捨てといてくれ」

「えー」

空のカセットボンを押しつけられたところで地上へ着いた。

「頼んだぞー」

あくび混じりの声を尻目にぼくはかごを出た。そこに待ち構えていたパンツスーツの雉村さんに突然「おはよ」とクールに言われてビクツとする。

「あ、おはようございます」

「うん。市坂くん。陶器の破片は紙か布にくるんで捨てるのがマナーよ」

にこつと微笑んで雉村さんはかごへ乗り込んだ。

雉村未知さんは2階に住んでいるのにいつもエレベーターを使っている。束の間のおしゃべりと佐奈華さんお得意の運勢占いが毎朝の楽しみなのだそうだ。多くの人がその日一日の準備にせき立てられている朝という時間帯に、そんな悠長を持ちきたす雉村さんの余裕は実にかつこよくて羨ましかった。

小さなエントランスを抜ける。曙光が薄く射し添ったアスファルトの上をとぼとぼ歩き、ぼくはごみ捨て場へ向かった。

かくいうぼくも占いの方は割と気にしていたりする。

毎朝エレベーターを使う住人に、佐奈華さんは鉛筆とサイコロを用いた独自の運勢占いを披露してくれるのだ。見るからに投げやりだし、実際これっぽっちも当たらないのだけど、朝のニュース番組でやってる星座占いよりは少なくとも楽しみにしていた。

因みに今日のラッキーカラーは砂消しゴム色。

佐奈華さんは一体、鉛筆とサイコロだけで何パターンの配色を紡ぎだす気なのだろうか。

ごみ捨て場について堅く結んでいた袋の口をなんとかこじ開ける。陶器の破片をひととり取り除き、ポケットに突っ込んでいたばろのハンカチでくるんでまた袋に捨てた。カセットボンベも押し込む。もう一度口を結んでから袋を放り捨て、ぼくはマンションに戻った。エレベーターの前では大家さんが真っ赤な長髪を艶やかに輝かせて立っていた。

大家さんは開いたドアに横からもたれかかって鉄扉を押し留めていて、そのせいでその向こうにある炬燵と筆筥が露わになっている。「何してるんですか？ 大家さん」

「お。作太くんじゃねーの！ ちよつと今さなつちと話しててね。あと何度も言ってるけど大家さんじゃなくて栢木さんと呼びなさい。三つ葉ちゃんでもいいけど」

朝から面倒くさい人だ。

「何かとつても失礼な感想をめぐらせたな？」

「とんでもないです。それより、エレベーター使っていていいですか？」

「いま取り込み中だからあとにしてくれ」

「あとつて……あと五分で家を出ないと入学式に間に合わないんですけど」

若いんだから階段を使え階段をつて顔をされたので、ぼくはさすがと階段を上った。

今年で三十路を迎える大家の栢木三つ葉さんは自宅を1階に構えていて、そのくせエレベーター住人の佐奈華さんと度々こうやって話しこんでるから、こういうことはぼくが越してきてちょうど一週間となる現在までに既に二度あった。もう一緒に住んじゃえよ。

4階の外廊下に出てさあ自宅まであと十歩つてときにぼくはその女の子の存在に気付く。

横顔からして不機嫌そうだったけど、やっぱり不機嫌ならしく、ぼくの部屋の玄関前で苛立たしそうに地面を爪先でこつこつしている。ちつ、という舌打ちまで聞こえてきた。

着ている臍脂色のブレザーがパンフレットで見たぼくの通うタノ

目学園の女子制服と同じだと思い至るのと、彼女が振り向くのが同時。

女の子の頭に何かが刺さっていて思わずおおっと言いつことになるけど、よく見るとショートカットと思われた髪型が実は見えずにいた右側のサイドテールだったというだけで、その種明かしに結局ぼくはおおっと言ってしまう。

陰のある細い目がぼくを捉えた。

「あーそこ、ぼくんちですけど。何か用ですか？」

「……え」

女の子はギョツとなる。

「401号の市坂作太さん？」

「はい」

「……あ。わ、私、昨日隣に引越してきたんですよ！ よろしくお願ひします！ これ。私の地元で有名なお煎餅なんですけど、よかったら召し上がってください！」

ハハハハ——と露骨な空笑いを浮かべながら女の子はきれいにラッピングされた菓子箱を差し出してきた。ぼくはお礼を言ってそれを受け取る。

「……」

しかし女の子は去ろうとしなかった。それどころかぼくを訝るような目で見つめてきて、そしてだんだんその目は元の刺々しいものになる。

「えと、何か？」

「……市坂さんっておいくつですか？」

「十五ですけど」

女の子はまたギョツとなって、それからぼくを上から下まで舐めまわすように見る。そしておもむろにポケットから手帳を取り出して開く。ちらと盗み見るとそこにはぼくの名前があつて、横に？刀傷？とか？補導歴？とか書いてある。そこでぼくはようやく、昨日の朝、栢木さんが「いたずらさせてもらったよ」と満面の笑顔で言

つていたの思い出した。これか？

「あの。そこになんて書いてあるか知りませんが、ぼくそんな人間じゃないですよ？」

「え？」

「栢木……大家さんに何か吹き込まれたんでしょ？」

「……ヤクザの息子じゃないの？」

「なんだそりゃ。」

ぼくが首を振ると女の子の目は更に陰しくなって、なんか悪いことをした気になってしまう。

「頻繁に暴力事件起こしてて、裏社会でブローカーまがいなことしてて、剛腕のサクちゃんの異名で親しまれてて、そのくせ義理堅くて非礼な行いは許せない前科三犯のスキンヘッドじゃないの？」

「全然違うし、見ての通りふさふさなんで」

「嘘！　じゃあなんで家賃があんなに安いのよ！」

女の子は怒りを吐きだした。

確かにここ、《パレス白詰草》の家賃は6階建て中層マンションにしては恐ろしく安い。けどその理由は401号にヤクザの息子が住んでいるからではないし、ヤクザの息子が住んでるからってあんな安さにはならないだろう。

「……エレベーター使ってみました？」

「エレベーター？　いや、使ってないけど。なんか使おうとしたら中に炬燵とか箆笥とか入ってて、誰か他の新しい入居者が運んでんのかなーって思ってた遠慮したの」

「ふーん」

ぼくは女の子をエレベーターに案内することにした。未だに怪しい者を見るような目だった女の子も安さの秘密がわかると言うところ承不承といった感じでついてきた。

かごはまだ1階にあって、少し悩んだけどボタンを押す。下から栢木さんの舌打ちが聞こえてきたような気がした。

十五秒くらいでかごが届いて鉄扉が開く。栢木さんがいた。

「よー作太くん。それに志奈子ちゃんも」

女の子は栢木さんに会釈する。ぼくは無視する。

「二人とも入学式は間に合うのか？」

「たぶん遅刻だと思います」

「え。あんたもしかしてタノ目学園の一年生なの？」

「うん」

志奈子ちゃんというらしい女の子は何ともいえない表情で改めてぼくを見てくる。やがてその目が安さの秘密はどこにあんのよって言うてくるから、ぼくはかごへの入域を促した。

「乗り込んでどうすんのよ。っていうかこの炬燵と筆笥いつまで…

…っ！ あ、あなたいつからそこに？」

女の子は絶句していた。

ぼくもかごに乗る。そこには佐奈華さんがいて「うーっす」とか言うてる。さっき見たとき跳ねてた髪の毛がきちんと整ってて、あーまた雉村さんが梳いたのかなとぼくは思う。

「まあいわる？出る？んだよ。このマンション」

幽霊ってやつが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0368r/>

かごの中でガール

2011年2月19日18時40分発行